

海浜リゾートのプランニングについて(I)

野尻 徹郎*・松井 憲**・妻夫 木一 秀***

1. はじめに

広大な砂浜海岸、リアス式の岩石海岸あるいは磯浜とポケットビーチとが交互に点在する内湾など、総延長約 29 000 km に及ぶわが国の海岸線は変化に富んでいて美しい。しかも国土の内陸部に平たん地がないこともあって、これら海岸線一帯は生活や生産の場として、あるいは交通路としてポテンシャルの高い地帯となっている。一方、わが国がおかれている地理的自然的条件からこれら臨海部をみると、台風による高波高潮、冬期風浪による侵食、地殻変動、地震による津波など自然の脅威にさらされている。このようなこともあって、普通「海岸事業」という場合のわれわれの意識は、まず「防災」、「国土保全」ということにあったように思う。しかし近年になって、経済活動の多様化、レクリエーション需要の増大、環境の保全等の立場から、海岸線一帯の利用計画も画一的なものから多種多様化の傾向にある。

この小文では、シーサイドリゾートのプランニングの立場から、まず事業における新しい考え方についてふれ、次に全国的視野からみたリゾートプランニングのパターン化を試みたものである。

2. 防災から開発利用へ

新潟県柏崎市の鯨波海水浴場は有名であるが、それより西方米山町にかけても、狭くはあるが海水浴場として使用できるビーチが所々に散在している。しかしこの付近は海岸線を国鉄の信越本線が走っており、比較的簡単に海に出られるところもあるにはあるが多くの土地の人がやっと線路を横断し、海岸堤防を乗り越えてやっと浜に出られるというような状態である。富山県氷見市の氷見漁港から北寄りの海岸線一帯は、穏やかな海域をひかえたすばらしい湾形をなす県下随一のレクリエーション適地だと目されるが、水際線ぎりぎりのところを交通量の多い国道 160 号線が通っており、歩行者が景色を楽しむためにゆっくりと立ち止まることも容易ではない。鹿児島市の磯ビーチは夏には大賑いであるが、すぐ背後

を国鉄日豊本線と国道 10 号線が並行して走っていて、広いスペースが皆無であることはもちろんのこと、名園のほまれ高い磯庭園とも完全に分断されていて、付近一帯は交通の難所となっている。しかも海岸堤防の天端があまりにも高く、歩行者に限らず列車からでも錦江湾は全く眺められない。伊豆半島西伊豆町の田子港から眺める夕陽は実に美しいが、最近完成した海岸堤防のため、すぐ背後の人家、ひろばからは海面が見えなくなってしまった。没する寸前の夕陽を眺めるには堤防の一部に設けられた陸こう(聞)をくぐってビーチに出るしかない。

このような例は全国至るところに実に多い。すなわちあまりにも車優先のために、人が歩いて渚に出ることさえ不自由するし、または防災一辺倒のために折角の景観を楽しむこともできない。

人間優先、環境の保全というからには、土木工学の本来的な意味である Civil Engineering という立場にもどった発想の転換が今こそ必要であるように思う。

(1) 人が簡単に浜に出られるように

幹線となる道路鉄道は原則として内陸に設ける。浜辺に至る道は小さなサービス道路のみとする。一例としてクラスター方式などを採用するとよい。しかし背後の地形や社会条件次第によってはこのような立地が困難な場

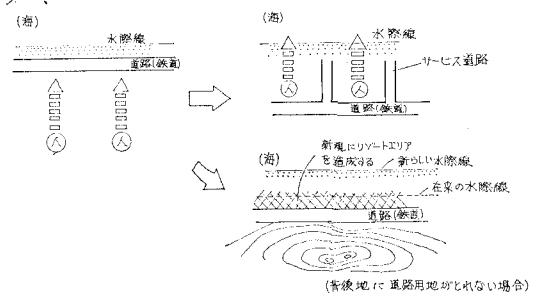


図1 新しい水際線利用

合が多いと思われるが、その時には離岸堤や突堤を用いて幅広い海浜を思い切って新規に造成する。

(2) 景観を特に大切に

堤防、護岸等の天端高をできるだけ低くし、線型についても周辺の景観との調和を図る。極論すれば構造物の天端高は来襲波の波浪特性や浜勾配その他の工学的エレ

* 正会員 日本テトラポッド(株) 事業開発部長

** 正会員 日本テトラポッド(株) 事業開発部

*** 日本テトラポッド(株)

メントによって支配されるという考えを改め、景観や利用性からある高さが与えられるというように考えてみたい。そして、なおかつ防災的保全的な役割をその構造物が発揮するには、どのような工法——養浜工、離岸堤工、突堤工、副堤築造、あるいは遊水域（これらはレクリエーション施設としても利用価値がある）の新設など——をわれわれは採るべきか、海岸技術者の腐心するところとなろう。

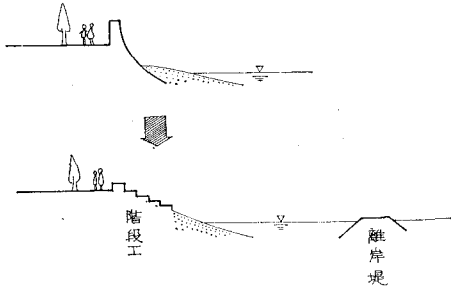


図-2 海岸構造物の変化

(3) 遊びの場、憩いの場をつくる

堤防、護岸敷などは遊歩道、サイクリングコースとしての利用も考えられる。突堤はフィッシングピアやプロムナードにも利用。そのためには構成材料の選択、天端高、昇降用階段、のり面勾配など断面の決定にも特別の配慮が必要となる。

しかし、このような考え方に共通する問題点は、建設コストとの関係である。景観、利用性を投資効果の立場からどれだけ評価するか、経済的にどれくらいの値とみなすか。立地条件、社会条件その他に大きく左右されるものであるだけに困難である。客観的な採点法の確立が今後の課題の一つであると思われる。

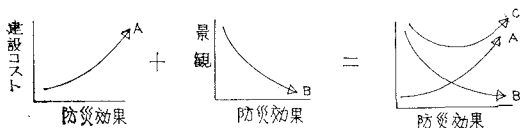


図-3 海岸構造物建設のためのファクター

3. リゾート開発からみた海岸線利用

(1) リゾート開発の意義

人類は自然を開発利用することによって今日の繁栄をもたらしてきたが、経済活動の拡大や都市化の進展とともに、生活の立場から自然は遠のいていき、自然の一員としての人間の不安は深刻化して、国民の自然への渴望は近年とみに高くなってきている。

こうしたことから、所得水準の向上、自由時間の増加、モビリティの増大、都市化の進展と生活環境の悪化、価値観の変化などの諸因子により激増が予測されている

わが国のレクリエーション活動は、必然的に自然を求める野外レクリエーションの形態が多くなってゆくものと考えられる。こうした野外レクリエーションには大きな空間が必要であるが、わが国のような狭い国土に1億もの人間がひしめきあって生活している国では、レクリエーション空間はある限られた範囲に限定せざるを得なく、レクリエーション需要の急増にともなう、いわゆるレジャー公害、観光公害などが社会問題として大きくクローズアップされてきている。いまや野外レクリエーション空間の整備は、社会的に要求されている急務といえるであろう。

特に海洋性レクリエーションについては、レクリエーション活動の先進国であるアメリカでも、「アウトドアレクリエーションの焦点は水である」という研究結果（米国議会屋外レクリエーション資源調査委員会報告1962. 1）が出されているとおり、将来の野外レクリエーションの主流となるだろうといわれている。特に四方海に囲まれたわが国のような高密度社会では、比較的に高密度利用が可能な海洋性レクリエーションが、国民に提供すべき健全な野外レクリエーションとして重要な位置を占めることになる。

この意味からレクリエーション空間としての海岸線のはたすべき役割が望まれるが、わが国の海岸線はいろいろな意味でもっともポテンシャルの高い地域であり、レクリエーション空間の確保には種々の障害が考えられる。しかしながら国民の豊かな生活を実現するためには、これらの障害を解決し、わが国海岸について開発と保存の調和のとれた総合的な利用を図り、新たな国民生活の展開に対処する必要がある。

(2) 海岸地形によるリゾート開発のモデル

シーサイドリゾートの位置、性格、規模、施設構成などのレイアウトは、一般に次のような事項を考慮して決定される。

社会環境：対象となる背後圏の性向、需要量、利用者層、交通体系、付近の他のレクリエーション施設、既存の将来計画、生活環境、既得権など。

自然環境：気温、日照、湿度、風況、降水量、波浪、潮汐、沿岸流、水温水質、漂砂、地形地質、景観、植生など。

またこれらの外的条件とは別に、経営する側の内的な条件、すなわち経営姿勢、経営能力などに制約される場合が多い。このようにリゾートのレイアウトの決定には種々のファクターがあり、計画地点の特性によるところが大きく、レイアウトの普遍的な解は求めがたい。

ここではリゾートのレイアウトに最も影響を与えるものの一つとして海岸地形を広域的な立場からとりあげ、これを中心としてリゾート開発のモデル化を試みる。

a) 海岸地形の類型化

わが国の海岸線は国土の面積に比べてその延長が非常に長い。これはわが国が多数の島しょから成っており、しかも複雑で屈曲に富む海岸線をもっているからである。またわが国の海岸は、大陸にみられるように同一の海岸地形が延々と続く例は少なく、小さな地形単位で区切られているといえよう。

このように、わが国の海岸地形は多種多様にわたり、その類型化には大変な努力が要る。しかしながら、ここではリゾート開発のためということで、比較的その計画が樹てやすい次のような地形のみに限ってみた。

外洋に直接面している海岸形状として、長大で比較的単調な砂浜海岸と複雑で屈曲に富むリアス式海岸、それに外洋からは遮蔽された比較的大規模な内湾の3ケースについて検討する。

① 長大な砂浜海岸：数キロメートルから数十キロメートルに及ぶ延長をもち、特徴的な景観としてほぼ一直線で雄大な海岸線と砂丘をもっている。また背後は、風、飛砂、スプレーを防ぐための保安林になっている場合が多い。保安林の背後は畑地が多く一般には生産性は低い。また大規模な人口集積地はみられず比較的に地価は安い。波や沿岸流は一般に厳しく漂砂の問題とともに開発を妨げてきた原因の一つになっている。したがって自然環境は比較に残されている。

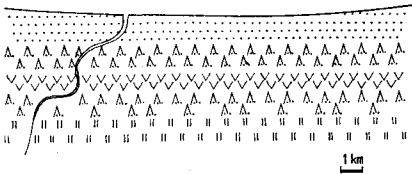


図-4 長大な砂浜海岸

② リアス式海岸：山地が海と接しており平坦地は狭少である。海岸線は屈曲に富み小さな入江と岬が連続している。また離れ小島を点在させており変化に富む非常に美しい景観を有し、自然はまだ濃く残っている。したがって、国立公園、国定公園などに指定されている場合が多い。水域は静穏だが比較的に狭く、湾奥には小規模な村落と漁港がある場合が多い。図-5に模式図を示す。

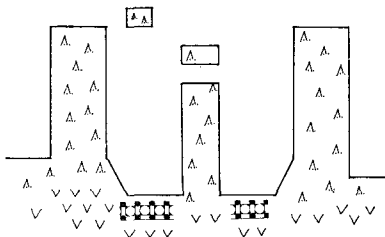


図-5 リアス式海岸

す。

③ 比較的大きな内湾：砂浜と磯浜を同時に内在させており、ほとんどの場合かなり大きな河川の流入がみられ、河口を中心として都市が発達している。本来の景観は、穏やかな親しみやすい内海風景であるが、現在は都市や工業地帯の発達により人工的な要素が強くなっている場合が多い。水域は広く穏やかであるが、水際線は最も生産性の高い地域であり、商港や工業港となっているケースが多い。模式図を 図-6 に示す。

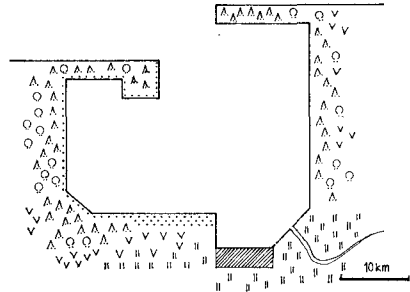


図-6 比較的大きな内湾

b) リゾート開発モデル

ここでは以上の3モデルに地形以外の要素を組み込んだリゾート開発のモデル化を試みる。

① 長大な砂浜海岸：この場合のリゾート開発には主に次のような問題点が考えられる。まず第一に、波、流れ、漂砂など種々の問題があり、付近の海浜に悪影響を及ぼさずに安全な水域を確保するには莫大な費用と労力が必要である。次に景観的に多少単調すぎて人工的に改造する必要がある。また、比較的辺りな場合が多く、需要地からのアプローチを新設する必要がある。つまり、この場合はリゾート開発の適地とはいいがたく、付近に他のリゾート適地がない場合にのみ検討すべきところといえよう。

ここでは、こういう前提の上に立ち、主にリゾートとしてのポテンシャルの大小を要素に入れたモデルを検討することにする。

①-1 ポテンシャルの高い砂浜海岸：巨大な人口集中地区に近くその影響圏に他の適地がない場合、巨大な需要に対処するため大規模開発を行なう必要がある。この場合の計画のポイントは次のとおりである。

- ・大規模な自然改造型、施設集中型リゾートとする。
- ・日帰りまたは週末滞在型的な性格をもたせる。
- ・静穏で広大な水域を確保する。
- ・域内でも施設集中地区と自然保存地区とを適当に配し、対比効果をもたせる。また水際線は人のための空間として残し車の主要動線は背後を通す。これから施設集中地区へのアプローチを別に設け、いわゆ

るクラスター方式を考えたほうがよい。

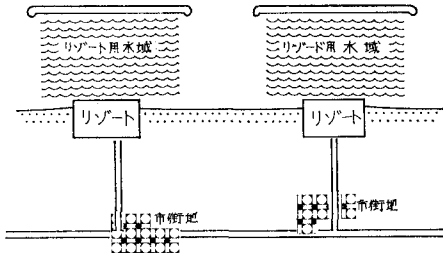


図-7 パターン A₁

①-2 ポテンシャルの低い砂浜海岸：需要量は少ないが付近の住民のためのリゾートが必要な場合は、砂浜海岸に中途半端な施設を設け付近の海岸線に異常をきたすようなことがあってはならない。

- ・地域住民のための福祉的なリゾート、日帰り、週末滞在型の小規模なリゾートを数多く作るほうがよい。
- ・既往の河口、漁港、港湾等を利用した、利用しやすい気軽なリゾートとする。
- ・この場合、河川、漁港、港湾の各管理者、保安林管理者との調整が必要である。

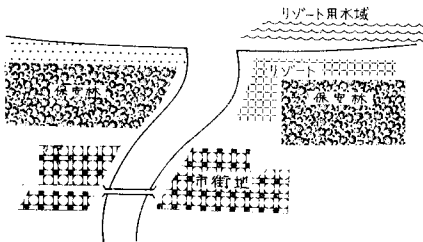


図-8 パターン A₂

② リアス式海岸：この場合は砂浜海岸と異なり需要地との距離がそのままポテンシャルの大小に結びつかないであろう。つまり自然が濃く残り景観がいい場合、到達時間の長短よりも現地で滞在できる時間の方が問題となりやすいと考えられる。すなわちポテンシャルの大小は主にシーズンの長短により決定されると思われる。シーズンの長短がリゾートのレイアウトに与える影響としては、他の海岸地形一般にいえることであるが、シーズンが長い場合は海の施設を充実させ、短いと陸の施設を充実させたほうがよいということがあげられる。リアス式海岸の場合のポイントは次のとおりである。

- ・既存の村落、港、自然環境をできるだけ保存し、それらと共にあるようなリゾートとする。
- ・自然保存のため小規模な施設分散型が望ましい。
- ・長期滞在型リゾートとする。

③ 比較的大きな内湾：この場合は需要地そのもので

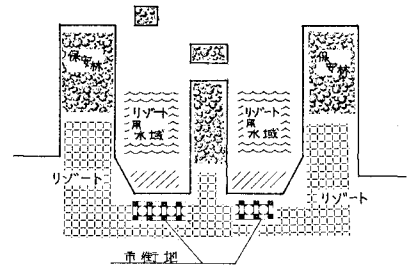


図-9 パターン B

ある大都市が湾内に立地している場合が多く、リゾートとしての需要は最も大きい。しかしながら景観や水質など環境面では問題が多い。また商港、工業港などとの水面の競合が大きな問題となる。一般には商港、工業港などの占有水面と環境悪化は比例関係にあり、ここでは占有水面の大きさにより次の3ケースに分けて検討する。

③-1 ほとんどが既利用の内湾：湾内のほとんどが市街地、港湾、工業地帯等で利用されている場合で、陸域海域ともすでに過密利用されているためリゾート開発の余地はほとんどない。特に海域は環境の悪化、船舶の航行などでその利用は不可能である場合である。この場合は都市人口も多くリゾートとしての需要は最も高いので、海岸や港湾に面したところに陸上施設を中心とした都市公園的な性格のリゾートを計画する必要がある。

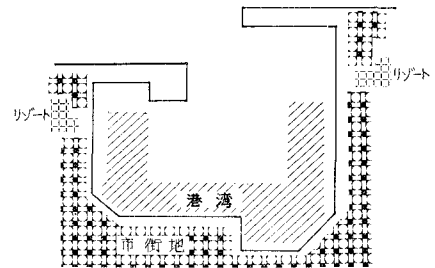


図-10 パターン C₁

③-2 いくらか余裕のある内湾：大都市があり港湾、工業地帯もあるが湾内にはまだかなり自然海岸が残っている場合であり、需要と供給がマッチするため最も価値の高いリゾートとなりうる。

- ・都市住民のための近郊型リゾートとなる。
- ・現在および将来の陸域・水域の利用区分を明確にする。リゾートと工業地帯の間は緩衝地帯としての性格をもたせる。
- ・将来もリゾートとして使えるよう環境保全に特に留意する。

③-3 自然海岸がほとんど残っている内湾：人口集中地に隣接しているが大港湾や工業地帯がなく湾内のほ

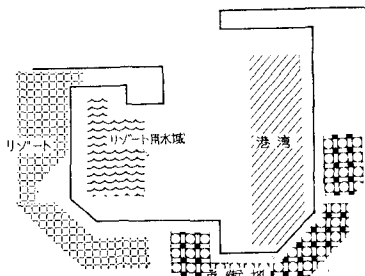


図-11 パターン C₂

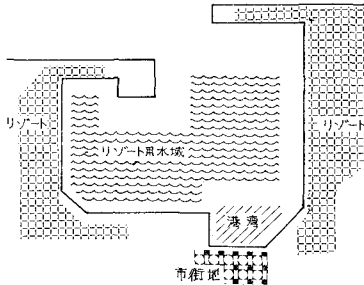


図-12 パターン C₃

関係、海岸地形などを考慮してゾーニングを行ない、おのおののゾーンの地域特性を検討した。それに前に検討した開発モデルを組み入れてみた。

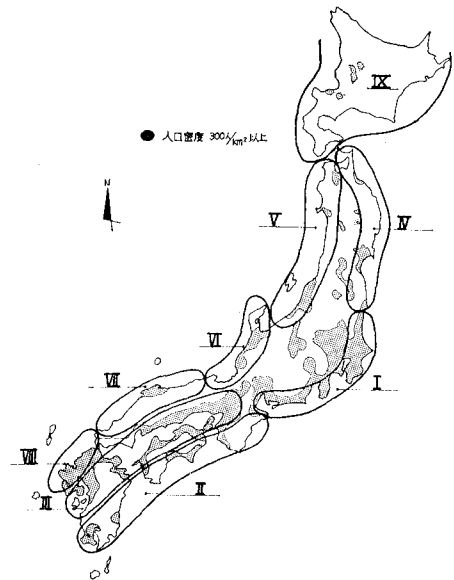


図-13 ゾーニング

とんどがリゾートとして利用できる場合で、最も容易に最も大規模な開発が可能となることといえよう。ここではあらゆる性格のリゾートが考えられるが、計画にあたっては既存の都市、港湾の機能、地方文化等を考慮し、さらにその価値を高めるよう一体化した計画が望まれる。しかしながらこのことは湾全体を一色に塗りつぶすことではなく、いろいろな性格、規模、機能など、特色のある多数のリゾートを有機的に結び全体として統一ある開発でなければならない。

(3) わが国海岸の地域特性

わが国は南北に長く、地域により気候的にも海象的にもかなり異なった状況を示している。ここではリゾート開発の立場からわが国の海岸を気候、海象、需要地との

ゾーンⅠ：東京一名古屋を結ぶ東海道ベルト地帯という一大需要地を背後に控え、リゾートとしてのポテンシャルは非常に高い。しかしながら海岸線はすでに多方面にわたって開発されており、残されたところは自然条件の厳しい海岸となっている。

気候温暖でシーズンは長い、地価が高く開発費は高い。このゾーンに適用できる特徴的な開発モデルは A₁、B、C₁、C₂ であろう。

ゾーンⅡ：需要地から遠くアプローチが悪いが、そのため未開発の部分が多く、残された自然が濃い。このため国立、国定公園が多く自然保護との調整が問題となる。黒潮洗う南海型気候であり1年を通じて暖かいためシーズンは長い。しかし一般的に雨が多く、特に台風

の常襲地帯となっているなど厳しい面も多い。長期滞在型リゾートとなろう。開発モデル；B、C₂

ゾーンⅢ：外洋から完全に遮蔽された穏やかな広い水域と美しい多島海風景、気候温暖で晴れた日が多くシーズなが長く需要地に近いことなど、リゾートとしてのポテンシャルはもっとも高いゾーンといえよう。しかしながら陸域水域ともすでにかなり利用されており、工業廃水による海水汚染、一般船舶や養殖漁業と水域の競合、それに潮流が強いことなどリゾート開発には問題も多い。このゾーン全体の全国民的立場に基づいた広域的な総合利用計画の策定が望まれる。開発モデル；

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
静岡	11.3	11.3	14.1	18.8	22.6	25.7	29.7	30.7	28.0	22.8	18.3	13.4
高知	11.2	11.9	12.1	19.7	23.4	25.8	27.4	30.9	28.4	23.6	18.7	13.8
広島	5.1	6.4	6.6	6.6	6.6	6.4	6.5	7.2	3.9	5.9	6.0	6.1
仙台	3.5	2.6	2.6	1.7	2.2	2.5	2.9	3.6	2.7	2.3	1.6	1.3
新潟	4.4	4.8	8.2	4.3	9.0	22.6	26.1	28.1	24.4	19.0	13.4	7.1
金沢	4.9	3.6	0.5	6.6	5.5	5.3	4.3	5.3	4.3	4.8	4.6	4.1
松江	4.2	2.4	7.9	4.7	12.5	23.8	28.2	30.6	25.8	19.5	13.6	7.6
福岡	2.1	3.0	4.7	6.6	7.2	7.6	6.9	8.5	5.6	4.8	3.5	2.0
宮城	5.6	5.1	9.6	6.4	21.1	24.9	27.0	37.0	22.6	26.4	14.9	9.5
松山	2.1	2.9	4.5	6.3	6.9	6.7	9.6	8.6	6.4	4.9	3.8	2.3
福井	7.3	7.0	17.5	21.9	25.1	25.6	31.5	26.4	20.7	15.8	9.6	2.4
徳島	2.7	3.4	4.9	7.2	7.2	6.2	5.6	9.2	5.0	5.2	4.1	2.4
香川	9.0	9.6	13.3	18.1	23.0	26.4	30.9	41.5	27.3	22.4	17.2	11.8
愛媛	3.4	4.3	6.5	6.5	7.8	6.9	7.2	7.0	4.7	4.6	3.7	3.7
山口	-0.2	0.1	3.4	6.2	13.9	17.5	22.4	26.8	21.8	16.4	9.2	2.4
高松	3.0	4.5	6.6	6.5	6.1	4.8	4.7	5.0	5.3	5.1	3.7	2.5

図-14 海洋性レクリエーションのシーズン（ただし、日最高気温 10℃以上、日照時間5時間/日以上とした）

B, C₁, C₂

ゾーンIV: 気候, 海象とも一般に厳しく, 海域施設中心ではシーズンが短く, アプローチが悪いこともありリゾートとしては無理があるが, 景観的にはすぐれたものをもっており, 内陸部の開発と組合わせたリゾートが考えられる。開発モデル; B

ゾーンV: 長大な砂浜と凹凸の小さい岩石海岸が連続した比較的に変化に乏しい景観であり, また冬季風浪や積雪のため冬季間の海域利用は不可能であるなど, 海岸部のリゾートとしては適地であるとは言いがたい。しかしながら夏季は非常に静穏であり, 潮位差が小さいことや海水汚染は進んでいないことなど有利な面も多い。開発モデル; A₂

ゾーンVI: 近畿, 中部といった大きなマーケットを控えており, また変化に富んだ海岸美と静穏な海域を有することから日本海側随一のリゾート適地といえよう。しかし日本海側に共通した問題であるシーズンの短さが最も大きい問題となろう。開発モデル; B

ゾーンVII: わが国有数の過疎地帯となっており, それだけに海岸線も未利用のまま残っているケースが多い。したがってリゾート開発は制約される要素が少なく比較

的に自由であるが, 残されている地方色を破壊することがあってはならない。開発モデル; A₂, B

ゾーンVIII: 砂浜海岸, 岩石海岸, 内湾など変化に富む海岸形状をもち開発適地は多い。また北九州のマーケットから近いわりに自然がよく残っており, 近郊リゾートとしては最もまとまった開発が可能である。開発モデル; A₂, B, C₂

ゾーンIX: 気候, 海象ともに厳しくシーズンも限定され, シーサイドリゾートのみではなく内陸部のウィンタースポーツなどを含んだ総合的なリゾートを計画する必要がある。開発モデル; A₂

以上, 各ゾーンの概略の性格と開発モデルを検討してきたが, 最後に次の事柄に注意を喚起したい。

リゾートは日常の画一的な生活パターンから逃れ生活に変化を求めるためのレクリエーション空間であり, リゾート自体の画一化は絶対避けなければならない。ここでは海岸地形を中心に自然条件やマーケットとの関係について検討してきたが, この他に地方文化なり風俗といったローカルのなファクターやプランナーの個性等により, おおのこのリゾートは当然異なってくるはずである。